

公務員離れを考える

一橋大学大学院法学研究科 准教授 田中 勇人

我が国は人口減少局面に入り、その影響はあらゆる分野において見られています。公の分野も例外ではなく、国家・地方を問わず、公務員試験の競争率が低下してきている昨今の状況です。かつて狭き門を潜り抜けてきた諸先輩方としては歯がゆい思いでいっぱいでしょうし、若手職員としても、倍率が低い中で採用されたという目で見られてはいないかとの忤怩たる思いがあるに違いありません。しかし、こうした時期だからこそ、今一度、役人とはどうあるべきかについて改めて問い直して、国民、住民の安心・安全で豊かな生活に貢献できる、しっかりとした公的部門を作り上げていくということで一致団結していきたいものです。

ここでご紹介したい1冊目は、『役人学三則』〈岩波現代文庫〉(末弘厳太郎／著、佐高信／編、岩波書店、880円)です。大正から昭和にかけて、元東京帝国大学法学部長である末弘厳太郎により書かれた短編集で、いずれも面白い内容ばかりです。

本のタイトルにも用いられている第1篇「役人学三則」では、昭和初頭に書かれたとは思えないほど、現代の官僚機構にも通ずる課題を皮肉たっぷりに3カ条に分けて指摘しています。その一端をご紹介しますと、第2条では「およそ役人たらしとする者は法規を盾にとりて形式的理屈をいう技術を修得することを要す」と痛烈に批評しています。我々が日頃の業務の中で、住民や事業者の方々を形式的な理屈で有無をいわずやり込めて、それを自身の公務員としての成長と誤解していないか、改

めて自戒の念を呼び起こされる作品です。

続いてご紹介したい2冊目は、『えっ！死ぬとか生きるとか、知事命令?』(滋賀県総合企画部企画調整課企画第二係／著、文芸社、1,650円)です。

滋賀県庁において、令和2年度から実施している「死生懇話会」の取組の中間とりまとめとして発刊された作品です。こうした独自性のある取組を図書としてまとめるなどにより、広く国民、住民に知ってもらうことは、公務員という職業に対する関心と呼び起こす効果も期待されるのではないかと考えて選ばせていただきました。

本作品の楽しみ方は3通りあると思っています。まず1つ目は、純粹に個人の死生観を深めるためのものとして楽しむ方法です。懇話会や個別取材などの中で示された、医師やケアマネージャー、僧侶など死生に関わる人たちの考えが、あえて最終的な結論を導き出さない形で、本作品の中に盛り込まれています。

2つ目は、県庁の意思決定過程を赤裸々に綴った作品として楽しむ方法です。よくぞ知事がこの内容でゴーを出したと思うほど、事細かに書かれていることには驚かされるばかりです。

3つ目は、県職員の成長物語として楽しむ方法です。本作は本事業を担当した中堅・若手の2名の職員が語り部となる形で描かれており、前例のない取組を進める中でそれぞれの職員の考えの変化や成長を見て取ることができるストーリーとしても面白いのではないのでしょうか。



『えっ！死ぬとか生きるとか、知事命令?』
滋賀県総合企画部企画調整課企画第二係／著 文芸社



『役人学三則』
末弘厳太郎／著 佐高信／編
岩波書店